

門ヲ9
號 3875
卷 3

剪花翁傳前篇卷之三



四月開花之部

元日立春之例



金石

○白兔花

真の兔の花之色潔白 開花四月上旬 英大と南燭の英の

房の形は紫類の房はこれとの毎葉の間より左右小出て長く
伸る満開を積る雪に似たり 育方升水の方櫻兔の花小月

○金樺

早夏菊 花八重 色濃赤茶 開花四月上旬より下旬まで 方日向

地二分湿 土回基 肥淡小硬 分株 株小く芽の今なら秋彼岸より 缺取

追々正月迄小井とより苗代とより 櫻十日よりして根付らるる淡小便

前花翁傳前篇卷之三

早稲田大學圖書館
第26.6.8號
藏書

と澆ぐへ一畝小移して壅土を寒前小入寒中より丘月中淡大便と入へ一西北の
風防と高さ二尺許花終るまで圍ひやへ一苔萌を前より肥氣を忌む
肥と澆ば花より出て出さく一又株の芽と其終育る時を成長一がく
たらし成長しても蒼りくまも菊吸虫の生ぶると甚一よそ株は不用の
芽と共小掘捨て一升水の方の切口を焼く一又和木艸と枝を能焼もは
己下の夏秋寒の諸菊も育方水上の方等並ひは

○化偷艸

花黄色 葉赤形ち蘭小似たり根も亦のく一 菊花四月上
旬より五月小至る大概盆植物へ方半蔭 地中干 土回壅又砂壘 肥 油粕
春芽出一の頃淡小便と澆ぐへ一 分株 春彼岸一 芽のりえ

易たりのゆを半蔭と好より能育つその高さ一尺五六寸りかふなり
升水乃方々切口を焼く一

○石竹

花赤色 菊花四月上旬 方日向 地一分湿 土摺る 肥
茎交り土又淡小便 下種 秋彼岸 移 十月中旬へ

○薊

花の色紅又淡紅又本紅又絞り又紫と色と十種よりあり 菊花
四月より後より霜月迄ありこれ上種なり 方地土肥より下種

春彼岸此時小淡小便澆く一 野薊の花赤色ふまゆ黒く鈍く下品
此種小葉の蠅引に似るものあり又鬼薊を芒刺甚しく平常の薊は
まふと葉劣りありて花濃紅くを美あり又白花小三種あり二種大小

一種ハ莖六角一七英多く高二三尺之升水の方剪得く少間切れ少一
凋えたるれ切口より焼冷水に汁やべー又方切て四割 和本州
唐鹿尾藻右二味とるる冷水に汁やべー

○藻 花白青又姫あやあり花青一ツのきも 開花四月上旬

方日向 地二分湿 土ろくろん 水気少き方より 肥 小便芽出し前ふのじ

芽出し後ふのじ 分株春彼岸 十日前より

○青杜艸 花白形南燭の英ふ似より 開花四月上旬 方地土肥

莖葉も亦南燭の芽とんれくく小敷本出く株とふり長七八寸
より一尺ふやぶ分株 春芽出し前又九月末に 茶室の挿花も用ふる

○櫻艸 數種 花赤又淡紅 開花四月上旬 方日向 地二分湿 土莖交又

砂雜より 肥油粉春彼岸 芽出前ふのじ 下種春彼岸 分株秋彼岸より

○玫瑰 花白淡赤 赤白紋 開花四月上旬 方三分陰 地二分湿 土回莖

肥大便寒中小入へり 分株寒中より 形薔薇ふ似く芒刺多く杉の葉

のざく繁密之 升水の方切て割 和本州とるるみより焼べー

○風車 花白葉淡赤小青と會ふ葩ふ隈入之 開花四月上旬 方半陰

地一分湿 土ろくろん 肥 淡小便春彼岸 芽出しの時一兩度とるるべー

分株 春芽出しより 形デシふ似より

○石南花 花重色淡紅形蔓豆より 開花四月上旬 方日向 地二

分濕土山土 肥于麩 移春ひんよ

○薔薇 花濃紅 開花四月上旬 方日向地三分濕 土々々 肥于麩

油粕二月上旬一度九月上旬一度へ 櫻春彼岸 移冬月よ

○白薔薇 花千重色白 開花四月上旬 方地土肥 櫻移等薔

薇小同 葉形ら玫瑰小似く大き山吹の芽出より細く

長根く蔓くけあり

○馬蘭 花青色白あやうな色く之く葉厚く堅く幅狭く 開花

四月上旬 方日向地干土砂雜 肥大便寒中へ 春淡小便兩三度々々

分株秋彼岸より早春までふんふん葉く

伸々々七八寸より二尺ふんふん下種ハ成長せり

○鐘艸 花白自ら之く垂低く之 開花四月上旬 方三分陰 地二分

濕 土えらうとと 肥淡小便寒中々々へ 芽出て兩三度澆ぐべ

移秋彼岸より十月まで

○紫蘭艸 紫蕙又白菱 花赤小紫かまり又白 開花四月上旬 方三分陰

地中干土肥土 肥淡小便花まふととへ 分株十月より寒中まで

長六寸より一尺ふんふん

○仙臺菽 花黄色形豆乃花小似り 開花四月上旬 方日向地二分濕

土楊ぐ肥淡大便寒中へ 移秋彼岸は 升水の方ハ切て焼へ

○宮根兔の花

源平卯卯の 開花 四月十日前後之花 白く中頃淡

赤く後大赤く 先後丹開花各色変りて紅白交り雜りて源平とあるこ

育方 升上丹方赤くさうの卵の花小同

○芍薬花

花白淡紅濃紅紅白交等品數多し 開花 四月中旬 方日向

地中濕 土回莖 肥大便寒中芽出さう淡小便とくく 分株 移

秋彼岸く 上品あるは倍ふまがらう葉大總りて乱れ花直く

連りて英四のく辰時刻より開き未の刻に葩收て葉と揃ひ包む翌日

も開くと昨日のく是れくあまの五日小やづ之下品なりそのは

倍ふ呼く踊子さう乃ら開じまうて次第ふちあひ之 升上の方切

○と焼逆水にて水取小杆みだ後用之

○丹頂花

花白魚ら至りて切艸の花のく 開花 四月中旬 方二

分陰地二分濕土をく 肥沃復寒中より花を打とく 櫻

春彼岸は高さ一尺より二尺餘もゆる之 幹枝細く葉も之く赤い

長一歩もろく葉一寸は間八九節此間毎小花を結し恰も雪のかまはに

○白頂花

花白小微赤と帯たり 開花 四月中旬 育方 丹頂花

同く元是同種も花葉も少く大きく菱細長く廣がり開きて形容

あまの丹を丹頂とて花赤らるる白鳥とて白くはるる此兩種

の名稱彼と是と顛倒なり尚違考すべし

○猿猴艸

花一重なり八重なり色黄之形煙河骨小似なり花葉丹莖長く横斜に延びて名を猿猴と云ふ四月中旬 盆裁少 肥油物を入る

贈小植其芽出の時淡く便西三度花前小面度度分株春はくんは

○紫陽花

三種 色紅白藍 開花四月中旬 形梨花の如く英數十箇 群簇て徑三寸餘其房もめり開けを徑四五寸をり又八九寸許

小なりもあまも挿花中をり方日向地土をり肥大便寒中

入金 春彼岸より淡小便三五枚をり櫻春彼岸より 移正月

中 升水の方の切口と懐へ 同種小班入葉らり

○樂艸

花紫陽花と同種之をば攢簇 房は周りの英ハハハ中側

かり英ハ色青く蕾より葉肉を見ると十分小開なり開花五月方升

水の方紫陽花と同 剪花者是がく艸と呼ぶと名を美と云ふなり

此房遠りの英を白く開て内の蕾は青くして十分小開を其貌宛も類

小似なり故に此呼ぶなりと思ひに果て此由て既野山草小なり

さきや又一書小曰太鼓ふがくと稱するものハ樂ハ太鼓より呼ぶなり

かろく 花小糸糸ものハ繡球花なり是も太鼓より出るなり

盆 種類多々又大小乃手球花と繡球花と書けり此種類

の花皆樂ハ名なり

○松本仙翁花

花白淡赤と黒紅等之 開花四月中旬 云何方瞿麥

同形ヲ瞿麥ノリ大キク和シ之 分株冬集入頃より春芽出
まで小く入 升水ハ切口で焼べ

○五柳

挿挿 花之淡紅小藤葉色ハ氣味ハリ 開花四月中旬秋九月
も亦花ハリ葉々青緑ノリ形ハ天門冬ノノリも大クハリ
枝微細小茂ク甚清クハリ芽出ノ時節諸柳小同ドモトモ
切リ挿シ善後葉々繁テノリニ葉切ハ大葉ノ摘取置ベ小嫩ク締メ
升水ノ方ハ切小鋸目入

○鳳凰艸

花赤ク形ハ下野ノ花少シクハリ 開花四月中旬 方三分陰
地二分濕 土ニノリ 肥淡小便春彼岸前小西三度マツ花前ニ西放

澆ノリ 分株移も春芽出ノ前或ハ秋葉入ノリもノリ葉々
形ハ葡萄ノ葉ノ似テ大ニ秋海棠ノ葉ノノリ 莖高ニ三尺ノリ小

カクハリ 升水ノ方ハ切小焼べ

木天蓼 花二重 色白形ハ小手毬ノリ大キク大手毬ノリ之

○木天蓼

開花四月中旬 方日向 地二分濕 土山土 肥大便寒中入ノリ 移

より正月マツノリ 元是山生ハリノリ

○藤戸

夏菊 花藤色 開花胃中より下旬迄あり 育方升上等諸菊小同
萱艸ノ之キヨリ似クハリ 開花四月中旬 方日向 地二分濕 土

○黄菅

肥淡小便芽出ノリマツノリ 分株九月末



○鐵線花

花重色水淺黄 開花四月中旬より六月中旬迄なり 方半陰

地二分湿 土えくく人

肥 油粕芽出しまへへー又花前も入るー

蔓と生ころけ地ふいへ根と取秋彼岸小移さへー葉をハコ甘蔓なり

升水の方剪口で焼へー

○車輪梅

花重色白形紫実の花小似たり 開花四月中旬 方三分陰

地乾 土えくく人

肥大便寒中小へー花前小油粕とへー葉形亦解

小似たり八月頃實登ると色黒ー 下種秋彼岸小なりて春彼岸

芽出と移 七月下旬より土月まで

○唐萱艸

花重色極黄腰ふー形よく抱え力なり 開花四月中

旬 方えくく人 地中湿 土整交 肥 淡小便寒前小なりて 分株

秋彼岸までー葉えくく堅く 莖枝も約りて出さけめて挿花小最

佳と並萱艸小勝さるりのなり

○華幔艸

花二種 赤黄 白蔓豆の花小似たり 開花四月中旬

方半陰 地二分湿 土回整 肥 淡小便 移春彼岸 花二箇向ひ

あぶと倍小掛鯛とつて 升水の方ハ切口で焼へー

○美人艸

麗春花 花重なり公重あり 色縁紅小腰紫 開花四月中

旬 方日向 地一分湿 土えくく人 肥 淡小便芽出後一度さくへー

花前小四五分さくへー 下種秋彼岸 苗代小なりて 分株十月下旬まで

升水の方朝名あさのあ間ま小こ剪き得とくは姑こ置おきますとこし一い週しゅうをまつた時とき切きりてくはす
や煖ぬ水みづ一い々々水みづ器が小こ杆かんやへ一い又また方かた切きりて四よつた割わり和わ水みづ州しゅう唐たう鹿ろく尾び藻そう
右二に味あじと挟みひちまひつ水みづ小こ杆かんやへ後のち用もちふべして

○沙羅椿

花はな重かさね色いろ白しろ形かたち初はつ嵐らん椿つばき乃なり如ごとくしてし腰こし低ひく一い閑かん花はな四よ月げつ中ちゆう旬しゆん

方かた向むかひ地ち二に分ぶん湿しつ土つち回まわ壘ら又また空くうはは肥こ大だい便べん寒かん中ちゆうにに接つ春はる彼か岸あし寄よ梅うめををへし

○花菖蒲

種しゆ々々閑かん花はな紅こう々々春はるよりより百ひゃく十じゅう頃ころ小こ咲さくは紫むらさ々々是こ不ふ後ごして

車くるま五ご日にちかかりり瑠る璃り紺こんハハ又また五ご日にちかかりり白しろ又また是こ五ご日にち許ゆるかかりり村むら雲うん絞しぼ白しろ紺こん

絞しぼ網あみ絞しぼ吹ふ黒くろ等らうのの班はん入いりりままてて班はん六ろく葩ぱののめめももりり是こをを三さん葩ぱ乃なり

八はち重かさねれれるるののををりり咲さ頃ころももにに同おなじじ方かた向むかひ地ち三さん分ぶん湿しつ土つち々々りり

肥こ淡たん小せう便べん芽め出でのの時ときよりより二に三さん度た々々々々一い其その外ほか々々用もちののをを

移うつ分ぶん株くさ春はる彼か岸あし一い

○土圭艸

花はな公こう重かさね重かさね形かたち鐵てつ線せん風ふう車くるま似に々々りり色いろ此この二に種しゆ々々濃こ一い閑かん花はな

胃い下げ旬しゆんよりより五ご月げつ上じやう旬しゆん迄いたりり分ぶん株くさ春はる彼か岸あしはは云い育よく方かた升のぼ上のぼのの方かた兩りやう種しゆ小こ同おなじじ

○唐擬寶珠艸

花はな白しろ淡たん紅こうとと帯おび々々閑かん花はな四よ月げつ下げ旬しゆん方かた三さん分ぶん陰いん

地ち土つち々々々々肥こ淡たん小せう便べん冬とう中ちゆうにに三さん次じ又また芽め出で一い前まへ二に四よ五ご度た々々々々一い

分ぶん株くさ春はる彼か岸あし前まへ又また秋あき九く月げつよりより十じゅう月げつよりより一い葉は々々々々々々々々々々裏うら小こ粉こな々々冬とう

已い下げのの擬ぎ寶ほう珠しゆ艸そう云い育よく方かた並ならびび同おなじじ

○大手毬花

花はな初はつ青せい々々後ご白しろ一い形かたち紫むらさ陽やう花はなのの如ごとくしてし也なり

徑二寸許の開花四月下旬方日向の房よりこれを枝とす三分陰あり
よく伸るもど英房共まゝの地土をよと肥大便寒中入る
移冬月櫻春彼岸分株十月頃より升水の方の切口と一寸より
割く皮を少し爛らうと逆水にて水器小軒置べ

○並萱艸 花重二重色黄にて黄赤妙隈り開花四月下

旬方標より地中湿土基難肥小便分株秋彼岸 同種斑入葉あり

○花柘榴 花千重大と徑二寸許色四種赤白縁白紋開花四月

下旬より五月小咲方日向地三分湿土をよと肥大便寒中より

櫻葉出前より移冬中より

○鸚鵡 夏菊 色淡紅開花四月下旬 育方升水等諸菊小同

○防風 色白く白小細開花四月下旬より五月小咲方日向

地于土砂難肥淡小便下種移も秋彼岸より十月まで

升水の方の酌して考へ

○蓮 色紅白縁紅唐蓮は紅黒をり開花四月下旬より八月中

向より春芽出前小泥舟中に植ふは水中より甚植か

きよの是と植ふは先づ俵小土を盆根と此中に軒挿して水底小沈む

なすはほどぬき池にても懸く植ふはよりして花と切得て蕾と

巻葉と水より土をよと開花葉或を疵ふとより葉を水

土かきし此丹水其方石膏又木通又川芎を以て焚出しよく
 了はし水彈ききりて切り此藥水てけり彈き詰り又方唐
 滑石川芎寒天各二分水一升を以て煎じ又方和水州唐鹿尾藻
 各十分目明礬寒天各四分水一升を以て煎じ又方明礬五合清水
 一升を以て搗之少間靜置し上水一合を取水砂糖二分を以て煎じ
 右三種の内方と水彈ききりてけり彈き詰りし

○淺

水の上ふ生れ花白色の開花上旬一挿花少く用ひしれ時り
 まり蓮のりしひ小葉をとりて挿す

○虎の尾草

花白開花四月下旬より五月まで咲き方日向地ニ分濕

土回壘 肥淡小便寒中に三夜又春芽出し前三夜を以て分株
 十月中旬より寒中迄を以て高と二尺四寸より三尺も及ぶ之九葉長
 葉二種あり升水の方前より後へ

○鷹爪

信ふでるふ開花四月下旬より五月にけり咲き勢丸
 弱く甲斐を以て六月小咲き方日向地ニ分濕土を以て肥大
 後寒中のみ五六月淡小便を以てかきあせを春芽出し花の
 色から雀見花と同くれと並九にて青く又花のよる小葉を以て
 挿すも下種もれ春彼岸より移す春彼岸古株を
 移すも活生かに能成長され六尺もやぶかり幹も太くあり

○ 苡子花

朱囊花 花重なり 重なり 色縁紅 腰白 又縁紅 腰紫 又白
白花は実を食料小先へ 此莖葉の薬用よきへ 開花四月下旬之方
地于 土えり 肥 淡小便冬より 春ひんまり 小赤みりり
下種 秋ひん 中日 腰紫 殊小赤みりり 此開花を 五六月おと
り 是も 升上を 切と 燻べ

○ 杜鵑花

上羅漢 淡紅 下羅漢 又熊野 八本紅 松島 赤白 源平
絞之 開花 四月下旬 方日向 地 三分湿 土 回莖 肥 大便 寒中 又梅天 小
油指へ 分株 櫻 春ひん 櫻 又梅天 小 松島 後 寄接
限 四季 咲と 咲と 杜鵑花 小 終り 終り

○ 水芭蕉

花白 開花 四月下旬より 五月 咲 株 春彼岸 水田 小植
成長 長さ 一尺 五六寸 小 盆 栽り 乃 之 育之 芭蕉 妙 剪花
半月 乃 之 此花 三百 保つ 越中 立山 の 半に 六澤 あり 此所 小生
もの 大 七八尺 小 及 水 氣 水 氣 是 真 好 澤 瀉 之 古 矢 氏 の 説 あり

○ 紺菊

菊 其 別種 之 花 重なり 重なり 色 烏頭 乃 花 濃
莖の 色も 紺之 又 白あり 莖 淡緑 又 紅あり 莖 赤 開花 四月下旬 頃
五六月 まで 是を 昨年 の 秋 彼岸 小 下種 又 九月 十月 頃 小
咲 其年 の 春 彼岸 小 下種 方 日向 地 三分湿 土 小 肥
淡 小便 芽 出 後 三度 花 前 小 両 乃 ぎ ぎ

○下野花

色淡紅濃紅白三種之一種鹿の子花 花形小毛毬花の如く
一房平うらうと盛り花の子のどく兼も小まりた似く之う 開花四月末
より五月ふゆまじり 方日向 地ニ分湿 土砂交真土より 肥淡小じん
春ひびん二度花前まで凡四五度度々 分株秋ひんよりよく育つ
とれり長二尺ふもつゆまじり

五月開花之部

○大葵

蜀葵花 花緋淡紅白三種之 開花五月上旬より梅天の頃小
咲之 方日向 地于 土えりり 肥淡小便時澆ぐ 下種 移

も春彼岸と期をも大さ六尺ふもつゆまじり

○錢葵

花赤絞 開花の時 葉育方とも前小同 兩種とも水上が時ハ
切と焼べ 又方朝夕の間小葉付く 姑かれ少く 肉もるると切は成

よく焼冷水漬置金 又方切は成四五割 和本州 唐麩尾藻右三時

とくも冷水漬せたる後月之 都て叶花は萎凋ゆるものと升水の

樹と施してもやうなるもの 身とてん剪之のどくは藪回一はして

後小升水の樹と施とべ 此藪回の方ハ卷末小見とせり

○千艸 百合

花は色真百合の色よりも甚濃 開花五月上旬より

○姫百合

花の色赤地あり黄地あり 兩種とも赤ひんり色の點

班入り 開花五月上旬なり

○唐子 姪百合 花の色赤くして葩厚く丸く 開花五月上旬之

○京百合 花の色黄くして赤み浅く 開花五月上旬之

○太田百合 花の色黄くして赤みぬく 開花五月上旬之

○皆川白夏菊 開花五月上旬之 近世皆川某四國より得し物の佳花之

○木槿 花一重色白 開花五月上旬之 方日向 地二分湿 土えく

く 肥 大便寒中に入ぐ 淡小便花前より浸ぐ 移櫻共小春

彼岸は 櫻又梅天より 此時の葉を取捨て 挿花より水上に

切て能焼逆水して冷湿の地ふ 野に薄延てぬし 覆ひ暫して水器

○杆サベ 己下諸本撞育方升水方並同 花の

○麒麟艸 花の色黄之形切艸は 英集て咲く 開花五月上旬

六月迄咲く 方日向るや花莖短く 又半陰に植むと高一又より

ふとや莖和らうなり 地土えく 肥 淡小便冬二枚春芽出 前

よ五枚浸ぐ 分株冬 一方朝夕の間剪得て 姑置に

凋むる時切てよく 焼冷水漬せし 又方切て四つ割 和木艸 唐

鹿尾藻右二味とも冷水漬せし 後用す

○壇持 蘭蕉 花黄り赤り 形 蕈荷の花乃細長き

開花五月上旬なり 是を新根て土に圍ひ置 春彼岸より移す 五月上旬

方日向地畝と高くして一分湿り〜湿氣多き時の枯朽あり 土
 え〜その 肥淡小便春芽出〜前二三枚又花前より〜
 下種 移春ひんり 三月中〜新根野ひす〜地三尺を掘砂で
 ろれ其上小柵と布又乾き土と布で新根と並べ又土と厚くおきて並
 ろ〜其覆ひ置ぎ〜剪花升水づれば時の切で改切〜凉水〜
 後水器小杆や〜或を焼くも〜 又方朝夕小切得〜藁灰
 汁〜よく煮色變〜所〜切き〜冷水〜杆や後〜
 又方 和木艸 唐鹿尾藻二味と〜よく煮も〜
 ○日々艸 花小莢 色淡紅又白り 開花五月上旬 方日向地二分

湿り 土え〜 肥淡小便 下種 春ひんり
 ○小車 俗小野車と云 色黄〜小莢集り咲〜 開花 育方日 艸
 用〜水氣と避〜 又方朝夕の間に剪得〜姑置少〜凋〜
 時切〜よく焼冷水漬や〜 又方切〜割和木艸 唐鹿尾藻 右二味
 冷水漬や〜後用〜
 ○大山蓮 天女花 花白大と椿の〜 開花 五月上旬より 六月上旬迄
 方日向地二分湿り 土回莖肥大便奥中に入〜 移春ひんり
 接〜同時小莢接〜
 ○薺 花種々近世異花數百品收挙〜育方畧之 開花 五月

○上旬より漸く咲く七月もやぶづ 升水の方切口で沸湯小入後水器
に并入やべし〜れれいまで盡く酢煮して後冷水小并置〜 儘小升水
又方龍骨でよく煮るもよし 又午後より夕方まで花を開きし前夜
蕾の蔓で切ると葱の末で蕾をすく許小切く蕾小帽せよく詰置重石で結
て井中に深く并入れ翌日備用のろ帽で脱して挿花小もよし

○擬寶珠艸 花三種 色白淡紅 又白淡青 開花五月 方三分陰
地土多〜らん肥小便冬中に二三度又芽出〜 前小四五度淺く〜

分株九十月又春い〜んま〜

○木槿 花一重 色白地小紅絞あり又白地小底紅あり又赤らり此赤り

一重らり宗丹と〜り 開花五月〜の木の槿も漸く咲續きて九月末まで
あり 育方升水の方とも五月上旬の白木槿と並同〜

○眼皮 剪夏羅 花赤 開花五月形仙菊花石竹瞿麥に似り方日向
地三分湿方三分陰あり地乾く方よし 日向で乾き地小植さよく育の

あま〜と莖短く葉焦〜あり 土え〜と 肥淡大便寒中〜 春破

岸前淡小便兩三度淺く〜 分株 春芽出〜 前又九月末は〜

園小在るを蕾一日翌日開き〜 二日都合三日係つあり 剪花の蕾一日都合
二日〜の故小巻出〜の蕾落〜と剪得〜れ挿花は用小充ら〜

○夏黄梅 花一重 色極黄 開花五月此花切らり新芽と生を是り

○亦花月傳の夏三番咲とて七月より十月まで漸く咲かり方日向地二分湿
 土回込 肥鳥の絞粕 移秋ひぐん後々 櫻春ひぐん二年夢と三寸
 ふうりに切り并べー成長五尺より六尺なり

○金絲挑

花二重 色黄 開花五月梅天より半月計もわり 方半蔭

地半湿 土回込 肥大便寒中に入れー 株九月中に分植べー 櫻春ひぐん

又枝三寸許小剪り少く斜に打て即時日覆とべー 後指頭をりて土乃
 乾湿を履く試みー 指形の速く入りぬる可く堅くして指點をりぬる
 既小乾く之此時水と漬くべー 後小又乾堅かる時淡小便と灌ぐべー
 寒中にも大便と入れー 葉の柳小似く枝を館色に葉長にして丸うら

積氣と治とるに妙ありとて剪花の時を日に出るまでとてー 其後の
 花のむかり 升水の切りより上を鑑てうみく并やと

○金絲梅

花二重 色黄形梅に似たり 開花五月 方地土肥株櫻等

前小同ー 葉丸くして柳小似り花より先小の之金絲挑の葉成
 求て積氣を副ふもと和葉舗謬混して此葉と共つて決て治せと
 ぬる剪花の時を早朝より 升水も金絲挑小なり

○万年青

老母州 藜蘆 周屋 花黄之 開花五月 方二分陰

地中湿り 土砂雜 肥油箱年中用つべー 又は老人絞粕より乾きぬる
 粉とかりて入ぐー 干鯛あどの油物を悪く是もよく乾きぬる粉とて



小町草

蓖麻子



金絲棗

蝦夷檜扇草

へくも可へさきやけんふら如ど 分株下種 移而彼岸 共ふちつふへ
 花壇小植もよう 大概盆栽の方勝まり 夏日の葎實を以日覆ふべし
 夕方より取らるる也 冬日の風寒雨霜を防べし 種類多し 挿花は用方
 り其三四種ハ○都の尉○宗碩○長島○筑前○久安寺以外自縦班
 黄縦班等種類異名ありもの數多之花実葉四季に應じて用方の之
 因云葉筒ふ成く左右合目なり 形拾吹矢羽の如く 長九寸許纒ふ
 一株而已 豊後より産る一覽せしむる希代の雅種なり
 ○南燭 花白之花莖小枝なりて小英群擡て一房とあり 開花五月方半
 陰地三分湿 土回莖肥をくそん 分株移もソのくそりよ

櫻春ひんよとく 接同節寄接之實ハ十月ハ熟を赤りり白ありま
 一種葉葉とつらり葉は莖三本づ並びて枝は似たり又葉の終はてり
 かりとのありつづきも挿系不用ふ之 此幹と接めむと方紙を枝を巻
 て水で浸し火よりゆて焼く自由曲くると傳を大概同くぐれど其
 傳のくくくしてかゝるくるとり是を理のまじ知く其まじは拙れ
 ぬちかり此紙を巻く雜巾に捲く巻べし又水より浸して沸湯で洗き
 て火小房くべしとて火氣通るまで多て一時の曲りかゝりまじ和ら
 がる所をよく炙り徐々又接く之急速にまじを彈くるとして曲結て
 冷水小入るまじ及くるとは是は焼くべしとて幹ハ二年物三年物は是傳之

○紅花 べいのかげ 未摘花 莖叶花 花の色濃黄くして光り 開花五月 方日向

地二分湿り 土をくまど 肥 淡大便 澁く灌ぐれば 金鑄とて葉は星の如く
かる黄に點入風を以て専らに下種 秋彼岸ふまじ 升水の燻べ

○細く艸 ほそくそう 花青く紫の色と含めり 白虎の尾と同く 開花五月より

二番切三番切より含めり 九月より方地土肥株 並ふ切時升水の

方虎乃尾艸より含めり

○蘭 らん 花青色小黄色と含めり 開花五月より七月下旬迄なり 香氣貴

とへり 方六分陸地一分半湿の例にまじり 土長流砂を微細に篩ひ整へ

て盆栽小くし 肥 艸節の煎汁を平日小澆く 移二月中旬は

根小腐入るる清水をゆてゆり水氣を拭ひ去り 植べり 長二尺より

よく生育をきき 三天もまじり夏月を設篋ゆて日覆をべり

夕方より設篋と取除き 夜露と受べ 雨天より雨覆ひをべり 秋彼岸

より屋外内く又の温室に入し 初冬より油障子とて風を

防ぐべし 風もれ日を日の光と當りし 此時より末夏頃迄油

障子と開く 夏あられ四月より後風もれ日の圍りもよ 寒中地窖に入し

○縦班蘭 たてまらん 花青色小黄色と含めり 開花五月葉小異班種より

畧して攀ひ是種類長より 育方前小同く

○晝白 ひるうか 花白淡紅と含めり 開花五月中旬郊野小生花蔓とてきれを

忽ら凋むりの冷水と逆水二三夜とどろ活出く勢ひ存りて

○小町艸 花白く中葩黄之花形せき々葉細之 開花五月中旬

海濱ふしのけらう生ぞ泉州濱寺田ふ多くあり

○有馬艸 花黄色葉を縮りて形ち山菜萐の葉ふれり 開花五月

中叟河州生駒山ふ産と里くを育らざり 名かゆ池田の栽樹

家とくも植育ること得と

○錦木 花せ色淡白 開花五月中旬 方大日向地三分湿 土蔭をん

肥大便寒中ふ又春芽出りの節油粕とへ 移十月より春まで

接寄接之砧を雌あり 雄木の矢羽の如なるの枝の左右あり雌木の

矢羽あるもの之實ハ七月より赤あり十月まであり霜やふくまで

実収之形松木好實よめて頭少く割るあり

○唐桐 花極緋英積簇て房もせり 開花五月より飛咲て濁

咲出り七月末とあり 育方隨意なり 盆栽ふして可也

○梭攔竹 花の色赤茶形ち近く 開花五月中旬 方三分陸 地二分

温土をり肥大便寒中小令 分株春彼岸後より又秋の土用後芽

と缺分植へ同種小觀音竹といふあり長二尺許と過と上花を育方同

○仙翁花 剪秋羅 畧してセンとも之り花赤 開花五月中旬より八月まで咲

方日向地三分湿土 艾埃土 肥油粕より 分株正月芽出りまで

○四季咲燕子花

花青色 開花五月中旬より咲あり是二枚目より夏花あり又土用より秋の花出さ夫より九月十月まで節々花出さ故四季咲の稱なり 育苗方三月燕子花と同

○扶桑花

俗ぶつサウ花と云舶来種之花二重色濃紅 開花五月中旬 勿形容木槿小似より 方日向四月より八月まで葎箕と覆ふ之 地盤

九月より三月迄温室小入之 土回整 肥油糟 移三月 播春ひびん

よー又梅天いよー長三尺許多分地害して生育よりゆゑ二年中

花のりよて開花の時をのりまをさすーそれど三月四月を花は

五月より花多しーかまら開花のとら五月もいつた

○寒薄

穂青より出之 方日向地二分湿土回 肥淡便寒中三枚淺は

○分抹秋彼岸

○班三種並葉と矢筈斑あり 蟻通と六縦筋班入之

○二季咲萩

色赤 開花五月より六月中旬より 方地土えと

○肥大便寒中に令

移分抹とも冬より春彼岸より 升水と

○酢煮と

已下栽培方升水の方並同

○檜扇州

花二重色黄くて葩本小黄朱の點あり葉は並ひ檜扇州

○似く中高く伸るなり

開花五月中旬より 方日向地二分湿 土回

○肥油粕 移正中

已下の諸檜扇州とも小方同

○國部檜扇州

花形とも尋常の檜扇州と同 種あまど甚低

○ 曲り屈むちやぶ花莖側へ延らねく丸く纏るれ其竟小外出く咲く

○ 開花五月中旬 育方前小同

○ 水葵 浮蓄をたもどり 色青又白是上層 開花五月中旬より

九月迄花巧り 方水田溝泥を生り 下種春彼岸より 長二尺四五寸

中ふ前得く 艸葉と水小浸るる或は水藻を繋いで花と包み葉のて

よく巻水小く取土後逆水して置きてりて 又方和本州 唐鹿

尾藻二味を切て煮べ 莖短なる由ふ七八寸より 湯り

入る 後冷水小挿置よく水よく用ふべ

○ 菴麻子 かしんとも云 花淡黄色 開花五月中旬より十月まであり

方日向地二分湿 土莖交 肥淡大便 下種春彼岸 方地如是なる時を

高と四五尺ふちるる者長大なるものて好む時の方三分陰地四分湿ふる高と

七八尺より一丈もいりて一房長三寸より七寸まで 花莖の中心より

下の方より之を英群り咲中程より上より形朝鮮樺の実小似て色

青く大と楊梅子の程ある實と廿箇許結ぶ花の実小なり別々の莖心

にも亦葉は間毒の枝も剛く實登りて花尚咲たり葉の形も楓の葉に

似て七辨ほど大きくなり一尺許より上の方葉段とせし 此葉大中亦

切捨へ 仲秋迄の水よりぬきの此時に切てよく焼て逆水とへ 尚も

水よりぬいた時の醗煮とへ 仲秋已後の水よりぬく 升る

○辨慶州 花の色白く微紅と含み形も至く是く一房とあり開花

五月より六月より八月迄有り 方日向地乾土より肥淡小便株

春彼岸掘出して古株と去り新芽と分植べし是日と歴く三分交り

の小便とくくへし長七八寸もあり須葉生むるに至くはよく

心と配りて早朝水取捨べし或は木灰汁或は煙州の葉汁あやとくも

よく且弥地を葉虫も多く生じ株も瘦く育ちがはして花枝は

獨じ物屋上小在く炎天當るに瓦上にておつて芽と生じ白根は

わらわらと生じたるものへは神の赤慶州の名も入りあり此葉は蚕豆の

葉小同くくのみで吹をやくくものゆゑ小兒女子の散小口とくはり必

弄あむくことあつれ若砂糖と合し當り失命とある思ふべし

○蒲穂 五月下旬水田より生じ株秋彼岸より挿べし○大蒲の中

蒲の姫蒲此姫蒲を穂すいぐり葉は長くと同くして出るなり

○最上百合 花を並百合とくくは其無低くくして悉く仰れ

咲甚奇花に開花五月下旬有り

○竹島百合 花真白なり開花五月下旬有り

○鬼百合 花の色赤く濃赤の點斑入り開花五月末に莖高々

六尺もあつしその枝四方小出て一房とあり其くあつた六七筒

をうり多きく三十葉も生じくはり

○蝦夷檜扇艸 花二種赤色黄色最上品あり 開花五月末あり

育方既小とせ章小出たり 形容花莖短く葉もろゆるてよくあり
長七寸小過ざらぬ 雅曲なりて初心は挿花を甚妙あり 種の中は
冠らるものぞ 株をわらばれども殖ぐらんものあり

六月開花之部

○桔梗 花二重 白色 青色 二種 開花六月初より一番二番三番

まで 潤く剪て後吐咲と十月ふくまあり 方日向地二分湿土を
えん 肥干鰯とほく入る 淡小便も度々灌ぐべし 分株春芽出

のさねさぐべし 且平莖あつかり俗小いぢくとして専ら好あり 升水の

切口を焼くべし 焼只切捨るもまづべし さらぬ切らざるべし 如く

又方朝夕の間に剪得し 姑おれは区に潤ゆる時切口よく焼冷水

漬やぶら 又方切口を割和木州唐鹿尾藻右二味をそそ

焼て冷水小漬おきて後用之 但技振の行きを竹もどれ持り

付く升水とべし 又曲と好むとも思ふまじりまけけて升水とべし

是ふおきり都く艸花と伸屈させると如此とべし

○八重桔梗 花青 開花六月初 育方桔梗小同 二番切の

時一重小咲愛くともまづらへし 升水も桔梗小同

○鬼若 夏菊 色淡赤 開花六月初

○山崎 同 色濃茶赤 開花同上

○初瀬 同 色中淡赤 開花同上 池田乃初瀬と上品と凡つては乃

菊も 升水の切口を焼べ

○壇特 蘭蕉 開花六月上旬 育方五月壇特は下種春彼岸

ととべ 水上うらた時を剪口と又切故に逆水して後水黒小針置

各一或を焼くも有り 又方五月壇特小同

○縷紅艸 花の色極鮮英手く之く葩五辨して形も薺小似り

長六七寸小過り 開花六月上旬 方向あらん地一分漚りよ 方一分陰

あらん地乾き 土掘りて肥油糞芽出後より入る

下種春彼岸 芽と出ると其遅れもの最早と云ふは

待て子疑ひく必物芽らるるも下種して十五日目小生

りり尚或は五六寸或は十日廿日をうりも段々後とて芽生と又

そのもつたり一時出揃ふもの小はれ都て種形も長とこの此の

午房人參の種もがも亦同く葉形も眼艸の葉も似くあは至

細く長寸許あり花蔓物うて竹を枝或は艸莖等と建副へ

挿花の料あり醜くは横利く物と建副へ

○木槿 花十重 色赤形も芥子の如く 開花六月上旬 此千重の

赤も赤丹より之り千重の花に水とくく一重花の如くして水尚より
き時を切ると又切ぬく上酌して煮る

○女郎花 花黄 開花六月上旬之 方三分陰 地中湿 谷相小自出

生あつと花九月下旬之此種類元是山生其ものちり故小土肥等
走りうくく是れ以て推くまへ 分株春彼岸より 剪時

ハ早朝然るく 升水ハ切を焼く 下に出る同種音方升
水並同 又方朝多り間小剪得て姑置少 燗く時切

とく焼冷氷小漬せく 又方切を四つ割和木艸 唐鹿尾藻
右二味とくく冷氷小漬せく後用之

○鼠尾艸 溝栽 花の色赤形之く秋栽より冬はく花豆花の如く

あつて開花六月上旬より七月迄なり 音方大槩秋栽の如く餘を
隨意小とく 分株葉の葉小入 後より春芽出

前より小とく 升水ハ裁小並同
○玉簪花 即擬宝珠草 色白 花形上り之 開花六月中旬より八月上旬迄咲

方三分陰 地土より肥淡小便芽出 二三枚花前四五枚渡べ
茎二尺餘より二尺四寸より分株 春彼岸前又九十月より

○早紫菀 花紅藤色之形小車に似たり 開花六月中旬 方三分陰
地携り土回莖 肥淡小便芽より淡く 又寒中より春れりて

縷紅草



能勢蘭



檀特花

下種春ひがん 移芽三寸さうじゆより伸のび順じゆん 此時このとき西にし花前はなまへ二ふた段だん

淡小便たんせうべんとときぎぎとときぎぎとときぎぎ

○挾竹桃 花二重にじゆうなり八重はちじゆうあり色いろ蕾つぼみつゞりつゞり赤あかく開ひらくり濃紅のうこうなり

淡紅たんこうと紋もんりりななとと開花ひらく六月ろくがつ中旬ちゆうかんより七月しちがつ中旬ちゆうかん迄まで 方地はたぢ土つち根ね

もど 肥大たいだい寒さむ中ちゆうにに両りやう枝えだ入いる 移うつ十月じゅうがつより 播は分ぶん株くさとも春はる

彼岸ひがんより 升水しやうすいを切きりりとと焼やべべ

○岩藤 花赤紫色あかむらさき 開花ひらく六月ろくがつ中旬ちゆうかん 方三分はたさんぶん 地二分ぢにぶん 湿土しつちなり

より 肥淡小便たいたんせうべん芽出めだの時とき一段いちだん中程ちゆうぢやうより花前はなまへ二ふた段だん都合つうごふ三さん段だんあり

又干籬またのしきの出でけ水交みづまとと皮洗かわせんべべ 株春くさはる彼岸ひがん分ぶん植うべべ 升水しやうすい

○切きりり又切きりり蔓草まんそうの類るい小色せうしきと水みづ小侵せうしん 置後おきご水みづ器が小せう杆かん中ちゆうへ

○早神遊 夏菊なつぎく 色黄いろき 開花ひらく六月ろくがつ中旬ちゆうかんへ

○鬼菊 同中輪どうちゆうりん 色赤いろあか 開花ひらく六月ろくがつ中旬ちゆうかんへ 元小菊もとせうぎく之の芽めを揚あげ花はな二ふた輪りん

残のこりり中菊ちゆうぎくととああとと此花このはな開ひらく後ごよりより九月くがつ末すえよりより

○朽葉菊 同上 花千重せんじゆう色極黄ごくきやう赤あかと合あり 開花ひらく六月ろくがつ中旬ちゆうかんへ

此花このはな後ごよりより九月上旬くがつじゆうかん迄までとと鬼菊おにぎくの如ごとし

○孔雀檜扇艸 花二重にじゆう色黄いろきよりより葩本はつぽん小せう黄きやう朱しゆ點てんあり 半延はんえんよりより

筆縮ひつしゆくとと雅みやびあり 長なが二尺にせふ餘あま小せうつつとと勢いきほひ孔雀くわんせうの尾お小せう紋もんより 云い月げつ方はた

同種どうしゆ小等せうとうより 開花ひらく六月ろくがつ中旬ちゆうかんあり

○田村州 花色淡赤形薊小似より 開花六月中旬 方三分陰 地三

分湿 土多し 肥淡小便春彼岸より花前小五六枚とくぶ〜

下種 分株とも春ひんより 葉薊小似と芒刺あり

○澤桔梗 花の色青小紫と帯あり 開花六月中旬

より九月末迄咲出〜 方半陰 地二分湿 土回莖 肥淡小便春ひん

小とくぶ〜 移春彼岸〜 是山谷小多く生む〜 花形を

本薊小似と葉細長〜 升水切口と焼く〜 焼口とくぶも

可ぬま〜 切〜 ぐら〜 ぐら〜

○蔓 實を六月赤色〜 方日向 地干 土多し

肥大便寒中入〜 元山生みの故小水氣厭之〜 実形茨の實の

ごとく蔓形藤小似と葉わ〜 未熟〜 切〜 落〜

日干用〜 時〜 尤里小作〜 都て山里中〜 求〜

○鹿の子 百合 花地白小赤茶の飛點少〜 入り又淡赤紫の鹿の

子班入りあり 開花六月中旬あり

○金剛山 百合 倍小為朝百合〜 入り白地小赤鹿の子の點入〜 開花

六月中旬河州金剛山小生〜 他所小下種分株〜 ても決〜 三頁つ

〜 此花と陰干中〜 せりづ〜 浸〜 小丸小附〜

其切〜 妙ありとて

○秋海棠

花重色淡紅 開花六月下旬より九月迄花有り

方七分陰 地中濕 土舞壘 肥淡小便春芽出 小二三枚焼ぐ

下種 春彼岸 分株も同時に秋は未刈

十月頃迄小種子を収む 剪花時ハ夕方の露が帯るものより 又未刈

の露が可也 升水の剪得く勢以強きものハ切口を焼てより

又方朝夕夕に剪取節を洗

小刀を切月に入を沸湯小灰で入口より煮さめて後上下残

らぬ冷水を漬込 又後根本許冷水を并めて用之 葉小露氣有

下(西) 又方梨艸 唐鹿尾藻を煮もはるも肉のほろぬ所

○凌霄花

花の色外葩黄中葩赤 形萱艸より水く尚 開花

六月下旬より七月中旬迄花有り 方地土肥 分株 春秋

兩彼岸より 挿花 水かけのうすやみぬ葉を保つれば

花凋むん水より時を花のほろぬと葉凋むん 升水の方々

叶を唯朝剪りて夕方迄の花葉を保つあり

○白山葛

花潔白莖群攢く 頗る香氣強 開花六月下旬

育方隨意之俗ふデシシと煎服 小便濁を治す 或曰大毒有り

服すべからず 或蛇草或白山の字や名偽等と考へば

○茶引艸 雀麥茶賣草 花黄色形乙切草に似たり 開花六月末

より七月中旬迄有り 方半蔭地二分湿土を以て 肥大便寒中
よ入金 移 秋九月末より十月迄より

○郭公花 油點艸 花二種黄色より葩中筋黄にして左右淡黄

の隈に成く又赤あり淡赤を小丁子茶好色と帯り 形鐘艸に似れ
ども花仰ぐあり 開花六月末より方半蔭地三分湿土回莖 肥

油槽より小便流げの葉焦く干鯛の出汁二分雜の水で澆
くべし 分株春彼岸より 成長を中 黄花の大ききもの

一尺許の赤花の大ききもの三尺餘も有り 若水のり

時を切ると敲き爛して強き灰汁にて煮るべし

○菽 倍小篠より 又日野より 穂六月末より七月小

りの葉ももれ用ふ 方日向地二分湿土を以て 肥淡少ん
移春ひんより 升水と酢煮るべし

○能勢蘭 又慰蘭 花二重色白 開花六月末より方半蔭地二分湿

土莖土 肥淡小便寒中又春芽出 前又花前ともよ西に板の院
くべし 大能勢蘭は長二尺許中能勢蘭は二尺三四寸許小能勢蘭

の四五寸の移春彼岸より三月上旬迄より 若偶五月は咲くは
此花水上より 是を上酢を以て煮るべし

○高良薑 くろくま 又鵬蘭 むぎくま もり 花白小朱筋入り 黄小淡黒帯

あり花の莖の頂小出 くさき 開花六月末 すえ 音方 おとこた 升水 のぼり の方 あた 能勢

蘭小同 らん 立春年尾小在 たしゅんねんおし 開花六月下旬 あけ 立春正月 たしゅんげつ 在 あ 開花

七月上旬 しちがつじやう あり あ 立秋前 たしゅあきまへ 咲あり

剪花翁傳前篇卷之三 畢

